

第4回(2008.12.8 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「12月は師が走る」

旧暦12月は「極月」という。通常「師走」とも言った。したがって新暦の現在でも12月は師走と呼んでいるが、年末は大掃除をして新しい年を迎えるのが、古来日本の習わしである。江戸時代、12月13日は「煤払いの日」で、街中が大掃除をしたものである。

師走の語源は、年末はお坊さんが檀家をまわってお経をあげるため、街中を走り回るから師走と言ったとか、師走は当て字で、四季が終わるから、つまり「仕果てる」が語源だという説などさまざまである。ふだんは威厳を保つかのようあたりに睥睨してゆっくり歩く先生(師)も、借金取りに追いかけて走るほど忙しいのが12月だから「師走」なのだと言われているが、なぜ12月は借金取りに追いかけているかと言えば、当時の江戸では、米、味噌、醤油や酒などは、現金払いではなく「掛けとり」と言って、「帳面に付けた」いわゆる「付け」だったから、商人は年末になると清算のために家々を回った。そこで、居留守を使ったり逃げ回ったりした人も多かった。したがって、寺子屋や小さな剣術道場の先生も例外ではなかったであろうということから、そんな話になったのだろう。そのころの江戸っ子の気質から、年が改まれば「付け」の清算はまた年末になったという習慣もあったから、なんとか元日まで借金取りから逃れればよかったので、このような話が作られたのであろう。

このようなおおらかな習慣があったのは、当時の町民の所在がはっきりしていたのが大きな要因だったであろうと思われる。江戸時代に入ると、どの家もいずれかの仏教宗派に所属させる檀家制度が整い、先祖供養も寺院が行うようになった。家族全員の出生地、生年月日などを届け出させ、婚姻、就職、移住などの証明を出したし、旅行などのときの手形を発行するのも寺の役割だった。そういったことから、江戸時代では必ず寺には「人別帳」なるものがあって、人別帳にない者は「無宿人」といわれ、職に就くこともできなかった。こういった制度を「寺請制度」と呼んで、幕府は市民管理を寺にさせていたわけだが、その背景にあったものは、キリシタンの禁制にあったのも確かである。この寺請制度により、幕府は市民管理を寺にさせていたから、お坊さんの権威は非常に強かった。ちなみに、明治時代になって、武家政治から天皇による政治に移行したことから、天皇を頂点とする神道が見直されて、明治元年(1868)3月17日に「神仏分離令」が出された。僧侶も庶民と同じく苗字を名乗り、妻帯し、服装も自由に改めさせられたことや、それまで高いお布施や豪華な寺院仏閣など、僧侶の特権階級に対する庶民の不満などによる「廃仏毀釈」が行われた。多くのお寺は廃寺に追い込まれ、僧侶の生活が脅かされて、しだいに住職も世襲化されていった。その結果、僧侶の力が弱まった。また、町民がもめ事を起こすと名主や大家なども連帯責任を負わされるから、名主や大家など「町役人」にきっちり管理されていたことでもあり、清算をしなければ次回から「付け」もきかなくなることもあってこのような習慣ができあがったのだろう。

12月は一年の最後だからやり残したことを片づけて新しい年を迎えるので、この月にはたくさんの行事があった。その中の一つに、煤払いの行事があるが、江戸時代、例年12月13日が江戸城の煤払いの日と定めていたから、武士も町民もこの日に煤払いをした。そこで、江戸の町には、12月に入ると先端に葉のついた長い竹竿を背負って売って歩く「煤竹売り」がたくさん出た。

元禄15年(1702)12月13日、「忠臣蔵」で有名な元播州赤穂藩士の大高源吾は俳句を得意としていたが、主君浅野内匠頭の仇である吉良上野介の屋敷を、煤竹売りに身をやつして探ってい

ると、ちょうど師匠の宝井其角(たからいきかく)に出会った。そこで其角は、貧しい身なりをした大高源吾を呼び止めて、「年の瀬や、水の流れも人の身も」と一句投げかけると、大高源吾はすかさず「明日またるその宝船」と返句した。其角が、「煤だけ売りの姿のあなたを見ると、水の流れのように人の運命も変わる世の無常を感じます」と言ったのに対して、源吾は「明日は、待ちに待った討ち入りなのですよ」と暗に答えたのだったが、其角は亡き殿の仇討ちなど忘れて、来年はどこかの藩に仕官することを夢見ているのだと解釈し、立派な武士だったが、貧しさ故に忠義を捨てたものと誤解して、着ていた羽織を脱いで源吾に着せてやった。

翌日、其角は大高源吾など赤穂浪士 47 人の討ち入りの報を聞いて驚き、己の不明を後悔し、後に切腹して亡き主君の後を追った大高源吾の墓前にひざまずいて、軽率な判断と無礼な態度を詫びたのであった。講談「忠臣蔵赤穂義士外伝」の一席、お粗末さまでした。

煤払いが終わると、来客を胴上げする風習があった。そこで、嫌な上司をわざと胴上げして頭から落とすなどして、日頃のうっぷんを晴らしたそうだが、昔も今も嫌な上司への腹いせは変わらないようである。新入社員にお茶を入れてもらってふんぞり返っているご貴殿、知らないうちに、お茶の中に鼻くそを入れられていたり、コーヒーの中に耳くそを入れられていたりしていないだろうか。でも、そんな程度では可愛いものである。かなり以前の話だが、コーヒーにタバコを浸して飲ませたら死んじゃった、という事件があった。タバコの葉にはニコチンが含まれているが、ニコチンは非常に毒性が強いから、時には農薬として使われていたこともある。タバコの葉のニコチンは、煙になれば減少するから、煙を吸い込んでいる内はまだ良い。しかし、水では成分のニコチンが溶け出すから、飲んだらたまったものではない。もがき苦しみにぬいて死ぬ。年末だから、イヤなことはちょっとした鬱憤晴らしをして忘れたい気持ちはわかるが、いくら相手が虫けらにも劣る奴でも、ニコチンで駆除してはいけない。自分だけは、部下や妻に優しいから大丈夫だ、と思っているうぬぼれの強い御同輩、人間の心理というやつはそんなに単純ではない。どこで恨みを買っているかもしれないのだ。もしかすると、今この時点で「殺してやる」と決意している部下がいるかもしれない。また、奥さんは「亭主を家からたたきだしてやる」と真剣に考えているかのしれないのだ。「そうならば清々する」とか、「ここはオレの家だ」と強がってはいけない。貯金通帳や印鑑がどこにしまっているか知らないだろう。家の権利書もどこに隠されているか知っているのか。えてして子供は母親の味方だ。猫だって犬だって、いざとなれば餌を与える人が一番だ。さあ、一人になって何ができる？もうほかの女性にもてる年ではないだろう。

笑いごとではない。年末にはせいぜい部屋の大掃除を手伝って、ご機嫌取りに励まなくては大変なことになる。そのうえで、この一年を反省し、一年間の無事を祝おうではないか。